

腸室扶私菌ニ因スル皮下膿瘍ノ一例ニ就テ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38370

Nr. 1. Einfluss angestrengter Muskelarbeit

Vitalha-

Mitteltkap. per Zeit Reichtum Puls

Vor der Arbeit	3.8	5.2	1.1	80
Unmittelbar nach der Arbeit	4.3	4.9	1.6	164
10 Minuten später	3.6	5.2	1.1	104

事實過勞ノ後ニハ往々一過性ノ肺氣腫ヲ認ムル者トス。而シテ殘氣ノ遺殘ハ肺胞ノ擴大ヲ起シ増量ノ減少ハ胸廓ヲ一度ニ擴大セシムル神經作用ニヨル者ナラン、氏ハ其結論トシテ

„als die zweckmässigen, kompensatorische Reflex aufzulassen.“

トセリ、故ニ氏ノ發生說ハ反射神經說ニシテ胸廓ヲ高度ニ緊張シ肺氣腫ヲ起ス者トセザルベカラズ、其胸廓ノ緊張ハ血行心力呼吸代謝ニ及ボスコト已ニ論ゼル如シ

斯クポール氏ノ說ハ吸氣呼吸說並ニ榮養諸說ノ以外ニ立ル神經說ニシテ予ノ標本モ之ニ依テ説明スルヲ得ル者ナリ更ニ茲ニ Freund 氏說ナルモノアリ肋骨ニ化骨ヲ起シテ鐘狀ニ胸廓ヲ擴大セシムルトスレド多クノ學者ハ其變化氣腫發生後ノ續發的變化ナルト信ズルモノ多シ

百尺竿頭、注意スベキコトハ肺氣腫トハ如何ナル者ナルヤ、各學者ハ種々ノ想像說ヲ上ゲルモ、レン子ツク氏以來吾人ノ取レル說明ハ肺胞間隔壁ノ消失ヲ伴フ肺胞ノ過大膨脹並ニ確固ノ肺擴張ヲ作ラル、病的狀態ナリ

ト云フニアリ、然シ、吾人ノ今日ノ研究ヲ以テ見レバ嚔口病的狀態ト云フヨリ一症狀トスルヲ適當ナルガ如シ(2)

殊ニコーン氏ノポール說ガ益々確定セラレ得ルニ至レバ肺氣腫ナルモノハ肺胞ノ擴大セル者ニシテ從來ノ隔壁ノ缺損ハ正シク其「ポール」ノ擴大セル者トザセルベカラズ、殊ニ本標本ハコレヲ以テ易ク説明セラレ得ルナリ

(原著及實驗)

唯々茲ニ一考ヲ煩ハシ度キハ往々肺氣腫ハ氣管枝炎(殊ニ乾性)ニ由來スル者ナレバ、之ヨリ進ンデ隔壁ニ炎症ヲ波及スルハ事實ニ於テアリ得ベキコトニ屬ス、而シテ彼ノ彈力纖維ノ増加減少等ハ之ニヨリテ起ル副事ニ外ナラザルガ如シ、擬言スレバ肺炎ノ結果ニ外ナラザル者トモ説明スルヲ得ベシ、故ニ彈力纖維ハ氣腫ニ關係ナシ

腸室扶私菌ニ因スル皮下膿瘍ノ一例ニ就テ

特別會員(櫻木病院醫員) 中村欣一郎

腸室扶私菌ノ全經過中ニ於テ、室扶私菌ガ所々ニ轉位シテ、病竈ヲ形成シ、或ハ諸種ノ症狀ヲ發スルコトハ、既ニ衆人ノ知ル所ナリ。即彼ノ脾臟轉位ニ於ケル脾腫、皮膚轉位ニ於ケル蕁麻疹、腎臟轉位ニ依ツテ發スル室扶私菌尿等ハ類々吾人ノ相遇スル處ニシテ殆ンド腸室扶私菌ニ於ケル、固有症狀トシテ、記載セラル、モノナリトス。而シテ彼ノ耳下腺、骨系統、又ハ關節、筋肉等ニ於ケル轉位ニ至ツテハ、前者ニ比シ遙ニ其數少ナシト雖モ、其報告決シテ僅少ナリトセズ。

余ハ昨年十一月、本市櫻木病院ニ於ケル、腸室扶私菌患者ニ於テ、偶然、室扶私菌ニ因スル、皮下膿瘍ノ一例ヲ實驗シタルガ、其膿瘍形成ノ機点ト思フ可キ事實ガ、甚趣味アルヲ以テ此處ニ報告シ、併テ將來臨床諸家ノ注意ヲ促サント欲ス。

○患者二十八歳ノ男子 越野某、農業、

既往症略ス、入院當時ハ室扶私菌第三週ノ初期ト診斷、入院當時ニ於ケル、細菌學の試験ノ成績如下、

I 患者血清ノ凝集反應。

(原著及實驗)

50.(+)100.(+)200.(+)400.(+)600.(+)800.(+)1000.(+)K(—)
凝集反應材料トシテ使用シタル菌ハ、業室在來ノ者ニシテ、傳染病研究所
製造ノ、腸窒扶私馬免疫血清ノ一萬倍稀釋ノ者ニ於テ被凝スル菌種ナリ。

II 患者血液菌ノ性狀

生物學的性狀ノ稍特異ナル点ハ、ラクトムス葡萄糖加メトローゼ培地ニ血溫
培養ヲ試ムルニ、廿四時間後ニ於テハ酸ノ形成ヲ認ムル能ハズ、培養三日
以後ニ於テ始メテ培地ヲ紅變シ得ルモ、メトローゼヲ凝固セシムル能ハザ
ル点ニシテ其他ハ全然相一致ス

凝集反應試驗ニ於テハ前記研究所製造ノ腸窒扶私血清ニ對シ一萬倍稀釋ニ
於テ著明ニ凝集ス。
血清証明菌ノ細菌學的驗察ハ當時故在リテ單ニ上述ノ試驗ニ止メ、糞便試
驗亦行ハザリキ。

然ルニ患者ハ入院直後ニ於テ、一回大量ノ腸出血ヲ來シ爾來七時間ノ間ニ
八回ノ小出血有リ爲メニ前後二回ニ渡リテ約八〇〇ccノ食鹽水ヲ兩側大腿
内面ノ中央部ニ注入セリ。無論注入シタル生理的食鹽水ハアラカク攝氏
百度ノ溫ニ於テ一時三十分短二回ノ間歐滅菌ヲ行ヒシ者ヲ使用シ注射局部
ハ始メ石鹼水ヲ以テ能ク洗淨シ次テ昇汞水ヲ以テ十分ニ洗ヒ酒精ヲ以テ強
ク拭掃シ依の兒チ十分ニ散布シ滅菌綿紗ヲ以テ被包シ其間ニ介者併ニ術者
ノ手指ヲ反覆消毒、滅菌シ然後注射シタルモノナリトス即十全ニ近キ消
毒殺菌法ヲ講ジタルモノナルコトハ余自ラ斷言シテ憚カラズ。

患者ハ入院後十八日間ノ有熱期ヲ以テ全ク下熱シ下熱後第四日目ニ至リ卒
然右側大腿部ノ疼痛ヲ訴ヘタリ。

當時驗スルニ先ニ食鹽水ヲ注入シタル時ノ刺痕ハ全ク小癩痕ヲ以テ治癒セ
ルニ關セズ刺痕ノ上部約三センチメートルノ部位ヲ某点トシテ周圍輕度ノ
腫起ヲ呈シ壓スルニ稍軟、波動ヲ呈シ、且過敏ナリ、即趣味有ル化膿トシ
テ局部ヲ嚴重ニ消毒シ切開ニ先シ滅菌ブライマツツ氏注射器ヲ以テ穿刺シ

帶淡綠黃色ノ甚稀薄ナル膿汁ヲ得直ニ普通寒天斜面培養基六本ニ培養、試
ミタリ、

然ルニ血溫培養約二十時後ニ於ケル全斜面ノ發生コロニーハ總テ純培養ヲ
呈シ甚非薄濕潤性ニシテ僅ニ透光性ヲ帶ビ一見葡萄狀菌、又ハ連鎖狀菌等
ノコロニート其趣ヲ異ニス即反覆精査シタル成績ハ如次、

- 1 形態、運動。短桿狀菌ニシテ運動活潑ナラズ。
- 2 標準チアブス血清ノ凝否。短時ニシテ凝集ス。

此處ニ所謂標準チアブス血清トハ研究所ノチアブス血清チ一〇〇培稀釋
ニシタル者ニシテ疑問菌フイツセンノ目的ヲ以テ作りタル標準ノ血
清ナリ。

- 3 プリオン培養併ニインドル反應。發育明ナルモ菌膜及インドル
ヲ形成セズ、インドル試驗ハ亞硝酸加里及硫酸ヲ以テ試驗シタリ。
- 4 葡萄糖加寒天。發育スルモ瓦斯發生無シ。
- 5 牛乳培養。發育スルモ凝固セズ。

- 6. ラクトムス葡萄糖加メトローゼ(バルシコー培地) 血溫培養一週ヲ試ムル
モ醜ノ產生併ニ凝固ヲ認メズ(發育良)
- 7 ノイトラルロート寒天。發育、還元セズ。

- 8 窒扶私馬免疫血清ニ對スル凝集反應。
一〇〇.(+)五〇〇.(+)一〇〇〇.(+)二〇〇〇.(+)
四〇〇〇.(+)六〇〇〇.(+)八〇〇〇.(+)一〇〇〇〇.(+)K(—)

- 9 患者血清ニ對スル凝集反應。
100.(+)200.(+)400.(+)600.(+)800.(+)1000.(+)5000.(+)
10000.(+)K(—)

患者血清ハ下熱後十七日目ニ採集シタル者ヲ使用ス。

對照トシテ先ニ血液ヨリ証明シタル菌ヲ念ノ爲メ患者ノ血清(下熱後採集
ノ者)ニ作用セシメタルニ最高一萬倍ニ於テ尙著明ノ反應ヲ呈スルヲ認メ
タリ。

即上記化膿菌證明ノ菌ハバルシコー氏培地ニ於テ葡萄糖ヲ分解セザル点ヲ除クノ他諸性狀殆ンド瘻扶私菌ニ一致スルヲ以テ更ニ進シテ其毒力ヲ驗シパイフェル試驗ヲ行ヒタリ而シテ其毒力試驗上先ニ血液ヨリ証明シタル菌ノ毒力ヲ知ルノ必要ヲ生ジ分離後既ニ約四十日餘ヲ經過セルニ關セズモ行フコト、セリ。

動物試驗。毒力試驗ニハマウス及モルモットヲ使用シパイフェル試驗ニモルモットヲ使用セリ而シテ其成績ハ次ノ如シ

A、化膿菌ノマウスニ對スル毒力(分離後十三日目ノ試驗)

- 體重、一六、〇 マウス 1/10 白金耳、一四時後死、
- 體重、一五、〇 マウス 1/25 白金耳、一五時後死、
- 體重、一四、〇 マウス 1/50 白金耳、一三時後死、
- 體重、一四、〇 マウス 1/100 白金耳、生 存

B、對照血液菌ノマウスニ對スル毒力(分離後約四十日目ノ試驗)

- 體重、一四、〇 マウス 1/10 白金耳、九時後死、
- 體重、一三、〇 マウス 1/25 白金耳、九時後死、
- 體重、一二、〇 マウス 1/50 白金耳、生 存、
- 體重、一二、〇 マウス 1/100 白金耳、生 存、

C、化膿菌ノモルモットニ對スル毒力

- 體重、四一、〇 モルモット 1/2 白金耳、一八時後死、
- 體重、三六、〇 モルモット 1/4 白金耳、四日以内死、
- 體重、三五、〇 モルモット 1/10 白金耳、生 存、

而シテパイフェル氏試驗ノ成績ハ如次

- 體重、二七、〇 モルモット (對照試驗)
- 體重、二八、〇 モルモット (本試驗)

本試驗動物ニ於テハモルモットニ對スル最小致死量ノ四培ヲ傳染病研究所ノ瘻扶私菌血清〇、〇一グラムト共ニ適宜ノ滅菌食鹽水ニ混ジテ其腹腔内

(原著及實驗)

ニ注射シ對照試驗動物ニハ單ニ同量ノ菌ノミヲ注射セリ、而シテ本試驗動物ノ腹腔液ヲ注射セル細管ヲ以テ吸引シ驗シタル成績ハ明ラカニ溶菌現象ヲ認ムルコトヲ得タリ、

二十分間 菌 (十) 三十分間 菌 (十)

一時間 菌減少不同球狀チナス。一時間間廿分 菌其減少不同球狀而シテ對照試驗ニ供シタルモルモットハ注射後十二時間以内ニ死シタリト雖モ本試驗ニ供シタルモルモットハ死ヲ免レテ今尙健存ス、

即以上諸種ノ試驗ニ依ツテ化膿菌證明菌ト純粹ノ瘻扶私菌ナルコトハ疑ノ餘地無シ而シテ上述ノ如ク瘻扶私菌ノミニ因スル膿瘍ノキキハ敢テ珍トスルニ足ラズト雖モ本例ノ如キハ全ク食鹽水注射ガ其誘因チナシタル者ト認メテ差ツカヘ無カラシ、何トナレバ組織間ニ注入セラレタル食鹽水ノ組織ニ及ボス器械的壓迫作用、即是ニ依ツテ破ル組織ノ抵抗力減弱ハ少クモ血管外ニ排出シタル瘻扶私菌ノ發育ヲ容易ナラシメタル者ナラン、然リ而シテ食鹽水注入當時ノ患者ノ血中ニハ瘻扶私菌チ証明シタル事既述ノ如ク此事實ヨリ相像セバ食鹽水注入時ニ於ケル小血管ノ破綻出血申亦瘻扶私菌ノ存在セシチ疑フニ難カラザルナリ。

而シテ本例ノ實驗ニ依ツテ次ノ事項ヲ相像シ注意ス
一、瘻扶私患者ニ發スル膿瘍ハ例ヘ如何ナル細小ナル者ト雖モ、決シテ輕々視スル能ハズ是防疫上重要ノ事實ナリ。

由來總テノ膿瘍ハ衆人ノ深ク注意ヲ要セザル点アリは一ハ膿瘍ノ多數ハ瘻扶私菌等ニ因スル者多キガ爲メニシテ其害毒亦急性傳染病ノ如キ慘憺タル者ナキナリテナリ豈寒心セザル可ケンヤ

二、瘻扶私菌ハ葡萄糖ヲ分解シ酸ヲ形成スル者ナリト雖モ余ガ茲ニ分離シタル菌種ハ血溫培養ニ於テスラ分解遲々トシテ容易ニ酸ヲ形成セス其理由奈邊ニ存スルカ今日尙不明ナリト雖モ瘻扶私菌ニシテ如斯菌種ノ有ル事ハ茲ニ一言シ置クノ要有リ

